

4) [野生動物とヒトとの関係]に関する本委員会における共通理解について(案)

野生動物とは、本来は自然環境のもとで生息し、人為的な飼育や繁殖補助がなくとも自立的に生活環を完結する動物である。そのうち、在来の哺乳類は、日本列島が何度か大陸と陸続きになった第4紀の地史時代に北方もしくは南方ルートで渡来し、時代により変化した列島の自然環境に適応しつつ大陸とは異なる独自の進化を遂げ、面積に比して高い多様性と固有性を誇る日本の生物多様性(生物相)の重要な要素となっている。

3万年前頃にヒトが日本列島に住み込んでからは、食料や生活用品の材料を提供する生物資源として、あるいは人間活動との間に時として軋轢を生じる厄介な存在として、ヒトはこれらの動物に強い関心を向けつつ共存してきた。縄文時代にはシカやイノシシなどの大型動物は、食料として狩猟の対象であると同時に畏敬の対象でもあったが、弥生時代に農耕がさかんになると農業被害をもたらす害獣としての認識も強くなった。しかし、主要な大型哺乳動物の分布域は、縄文時代から江戸時代まで大きく変化することなく、ヒトは先住者であるこれら野生動物と多様なかわりをもちながら共存の歴史を紡いできた。近代になると、人口増加やそれに伴う開発など、いくつかの要因が複合し、大型哺乳動物の生息数や分布域の縮小、個体群の絶滅などがもたらされた。

世界に先駆けて人口縮小が社会問題化している現在の日本では、経済的な理由による一次産業の衰退と都市への人口集中が進み、耕作放棄農地の急増など、地方における土地の利用・管理圧の急速な低下が顕著である。同時に、大型獣の急速な分布拡大と増加がみられ、農林業被害や生態系への影響など、ヒトの側からみれば「被害」といえる現象が目立つようになった。それら被害は、自然環境と社会環境のいくつもの要因が絡まりあって生じており、「在来の野生動物そのもの」が問題ある存在なのではない。

複雑な問題構造を明らかにし、被害を防止もしくは低減し、持続可能な資源利用を実現するにあたって有効かつ適切な個体群レベルでの管理を行うことは、日本列島の生物多様性と生態系の重要な要素としての在来野生動物と共存していく上での急務である。また、個体数や分布域を著しく減少させている在来野生動物については、個体群を維持・回復されるための人為的援助や生息環境の再生などが課題となっている。

一方で、現在ではアライグマなどの外来の野生動物の増加・分布拡大も急であり、農業被害なども深刻さを増している。マングースなど生物多様性の保全の大きな障害となる外来種の問題も看過できない。これら侵略的な外来野生動物に関しては、原則として根絶が社会的な目標になるが、実現可能性には大きな不確実性が伴い、当面は被害防止のための有効な対策の検討が求められている。

持続可能な社会を築く上での野生動物をめぐる課題はこのような多様であるが、有効な管理のための科学的知見や社会的な情報共有が不足していることは、いずれにも共通する。